

第10回 ピースボート日韓クルーズ

PEACE & GREEN BOAT 2017



PEACE&GREEN BOATがめざすもの 市民交流が築いていく 東アジア共同体

本年10月30日、江戸時代の朝鮮通信使に関する記録が歴史的に価値の高い文書などを対象とした国連教育・科学・文化機関(ユネスコ)の「世界の記憶」(世界記憶遺産)に登録されることになりました。朝鮮通信使は、朝鮮王朝が日本に派遣した外交使節団で、1607年から1811年まで12回の外交記録や旅程の記録などが含まれます。日本は朝鮮通信使を受け入れることを通して、祭礼や書画や玩具など日本各地の生活文化に朝鮮の文化が浸透しました。豊臣秀吉による壬辰倭乱(文禄・慶長の役)で朝鮮王朝と日本との関係が非常に悪化していたことも踏まえると、江戸時代に朝鮮通信使が果たした役割の大きさは想像以上のものがあります。

日韓の関係は常に、政治からスポーツ、文化の面においても、どちらが優れているかとか、どちらがより強いかという比較の対象として語られることが多いです。そうしたなか、ユネスコへの申請にあたり、関係自治体などで構成するNPO法人(事務局・長崎県対馬市)が韓国の団体と共同申請したことの意義は大きいのではないのでしょうか。日韓両国の市民が共に誇りうる両国友好の歴史として朝鮮通信使を捉えたということの意味します。

日韓クルーズ「ピース&グリーンボート」は今年で10回目のクルーズを成功させました。これまでの参加者は延べ1万人を超えています。東日本大震災、セウォル号の沈没事故など日韓双方に様々な困難を抱えながらも、私たちは共同でこのクルーズを実現させてきました。今後も続けることで、朝鮮通信使のように未来誇れるような成果を残していきたいと考えています。

また、本年10月、ピースボートが国際運営団体として参加している核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)がノーベル平和賞を受賞しました。ピース&グリーンボートにおいても、在韓被爆者に証言していただいたり、長崎にて「核も戦争もない持続可能な東アジア社会をめざす日韓市民宣言」等を発表してきました。核兵器禁止条約は日本も韓国もまだ批准していません。米国の核の傘に依存しない平和な東アジア共同体を築いていくことは核なき世界を実現する道につながります。そのためにも私たちはこのクルーズを続けていきたいと思っています。

2017年12月

野平晋作 ピースボート共同代表





**PEACE
BOAT**

多様性にあふれる世界の人と人々が直接
「出会い」「学び」「行動する」場をつくる!

ピースボートの第1回クルーズが出航したのは、1983年。「みんなが主役で船を出す」を合い言葉に、好奇心と行動力いっぱいの老若男女が世界各地を訪れ、様々な国や地域に暮らす人々と直接顔の見える交流を行ってきました。ピースボートが目指すもの、それは船旅を通じて、国と国との利害関係とはちがった草の根のつながりを創り、地球市民の一人として、平和の文化を築いていくことです。そんな地球市民のネットワークづくりに必要な人との「出会いの場」や、世界が抱えるグローバルな問題を現地の人たちと共に考える「学ぶ場」、そしてそれを踏まえて実際に一人一人が「行動できる場」をピースボートは提供してきました。



環境財団

文化、コンテンツ、ライフスタイルで
環境問題を身近に、アジアの夢を
かなえるグリーン・ハブをめざす!

環境財団は 2002 年に設立された韓国最初の民間環境専門公益財団です。文化的なアプローチを通して環境の大切さを知らせる教育を続けてきました。日韓市民が同じ船に乗り、アジアの環境と平和など共同課題を解決していく「PEACE&GREEN BOAT」、環境と人間の共存をめざす「ソウル環境映画祭」、「環境危機時計」など様々なキャンペーンを行い、綺麗な地球をめざして努力し続けています。また、アジア生命プロジェクト「生命の井戸」や「太陽光電灯支援」、アジア環境団体支援や次世代の環境リーダー育成などの事業を通してグリーンアジアを作るのに力を入れています。さらに「子ども環境センター」を立ち上げ、子どもたちが命の大切さを学び、尊重し思いやりのある人間として成長できるよう努力して来ました。

2017 PEACE&GREEN BOAT		
日程	寄港地	
7/27(木)	夜	神戸出航
7/28(金)		終日クルージング
7/29(土)	朝	麗水(ヨス・韓国)入港
	午後	麗水(ヨス・韓国)出港
7/30(日)		終日クルージング
7/31(月)	午前	ウラジオストック(ロシア)入港
	深夜	ウラジオストック(ロシア)出港
8/1(火)		終日クルージング
8/2(水)	朝	函館入港
	夜	函館出港
8/3(木)		終日クルージング
8/4(金)	午前	境港入港
	午後	境港出港
8/5(土)	午前	釜山(韓国)入港
	夜	釜山(韓国)出港
8/6(日)		終日クルージング
8/7(月)	午前	神戸帰港



代表挨拶



吉岡達也（PEACE&GREEN BOAT 共同代表、ピースボート共同代表）

ついに「PEACE&GREENBOAT」は第10回という歴史的なクルーズを終えました。12年間、日韓合わせ1万人以上の方々がこのユニークなクルーズに参加されました。「10回」という金字塔はまさに、その方々おひとりおひとりの存在によって達成されたものに他なりません。しかし、「それで2005年の初航海の時よりも世界が平和になったのか？」と問われると残念ながら首をタテに振ることはできません。際限ない核兵器開発、内戦の泥沼化、大量の難民発生、拡大する歴史認識の相克、頻発するテロとヘイトスピーチ、そして気候変動の激化。21世紀は、夢の世紀ではなく、悪夢の世紀になろうとしているようにも思えます。しかし、私たちは、この10回の平和と環境のための日

韓市民のクルーズを通じ、未来への力強い「希望」を発見しました。その発見は、そんなに難しいことではありませんでした。相手の話に耳を傾け、自分の思いを語り、ともに笑い、ともに泣き、ともに旅をすること。そんな誰もができることを通じてその「希望」は見つかったのです。それは、私たちには国境や民族や言葉の壁を越え友人を作ることができる、ということでした。人間には不思議な力があるようです。それは、たとえ言葉や文化や習慣が違って相手の考えを理解し、相手の気持ちを想像し、共感することができるという力です。

たとえば、東日本大震災直後のクルーズでは多くの韓国からの皆さんが被災者支援の声をあげて下さいました。また、日本からの多く皆



さんはセウォル号の悲劇に心から涙されました。

私たちには国境を越えてつながる力があります。私たちはこの不思議な力によって得た世界中の友人たちとピースボートを35年間出し続け、韓国の友人たちと「PEACE&GREEN BOAT」を10回にわたり出し続けてきました。

私たちは、その友人たちとともに、東アジアに、そして世界に真に平和で持続可能な社会を実現すべく、これからも船を出し続けます。

とりあえず、第20回「PEACE & GREENBOAT」が船出するその日まで、ご参加ご支援よろしくお願いたします。

チェ・ヨル（PEACE&GREEN BOAT 共同代表、環境財団・理事長）

PEACE&GREENBOAT が10回目のクルーズを終えました。韓国と日本、各地域から海の上の特別な村へ駆けつけていらっしまったみなさん、ようこそ、ピースボートへ。国籍と世代や性別も違う私たちはたったひとつ、東アジアの平和と環境を守ろうという気持ちは同じです。そのため、私たちは「同じ船に乗り」それで自然に運命共同体となりました。私たちは7泊8日間一緒に寝て、一緒のご飯を食べながら自然と生態、歴史、文化があふれる寄港地を旅します。ふたたび、船に戻ったら環境と平和を語り合い、踊り、

一緒に歌うでしょう。単純に見えるその過程の中で、私たちはお互いに対して学び、共感しながら相手のことを理解できるようになります。

PEACE&GREENBOAT の過去10回をふりかえってみます。初めて船を出した2005年の日韓関係は激しく対立しました。毎年様々な困難に直面しました。しかし、私たちは続けて船を出し、対立を乗り越えるため数多くの努力をしてきました。それは、問題解決の種は人と人の間にあると信じていたからです。やっと私たちの対話の成果が水面の上に現れたのと感じます。



こんな時だからこそ、私たちは東アジアの平和と環境の木を大きく成長させるようにより多く交流すべきです。私たち一人ひとりが東アジアの平和と環境問題解決するにあたって非常に重要な役割を担っていることを心に刻みたいと思います。



日韓共同クルーズ「PEACE&GREEN BOAT」第10回記念共同声明 ～真に平和で持続可能な東アジア共同体をめざして～

第1回日韓クルーズ「PEACE&GREEN BOAT」は2005年に船出しました。

それは、戦後60年、すなわち韓国の日本植民地支配解放60年の年であり、かつまた日韓国交正常化40周年を記念した「日韓友情年」でもありました。そして、また気候変動枠組条約、いわゆる「京都議定書」の発効の年でもあったのです。

時まさに、世界では地球温暖化による気候変動の危機が叫ばれ、日韓では第一次韓流ブームが盛り上がる一方、靖国参拝問題、竹島/独島問題、「慰安婦」問題など厳しい政治状況の荒波が私たちを待ち構えていた時期でもありました。

しかし、私たちは、「今こそ、環境と平和を掲げる日韓のNGOが力を合わせ、市民の命を守る平和環境共同体の礎を東アジアに築かねばならない」という強い思いを共有し、東アジアの大海原へと航海を始めたのです。

その後、12年間に渡り、私たちは対話と相互理解と信頼によって数々の困難を乗り越え、ついに10回目の日韓共同クルーズを実現するに至りました。両国からの参加者は実にのべ1万人を超え、大型客船を使ったユニークな直接交流により、かつてない規模での日韓市民間の友情を築いてきたと自負しています。

その歴史の中で、東日本大震災と原発事故、そしてセウォル号沈没事故は日韓ともにあらためて市民の命と安全をないがしろにする政治と社会のあり方に向き合う悲劇的なきっかけとなりました。先ごろ、韓国では100万人キャンドルデモによって誕生した新政権が、原発の危険性を認め脱原発政策を宣言をしたことに対して、私たちは賛同と敬意を表します。同時に、未だ福島第一原発事故の教訓を無視し、原発推進政策を進める日本政府に対し脱原発、自然エネルギー推進への政策転換を強く求めます。

一方で、「PEACE&GREEN BOAT」は初航海以来、4回にわたり被爆地・長崎を訪れ、日韓市民とともに直接、被爆者の方々の証言をお聞きしてきました。それゆえ本年7月7日の国連における核兵器禁止条約採択は、まさに私たちの長年の願いの実現でもありました。しかし、残念ながら日韓両国政府は「核兵器による抑止力は必要」という理由で、この条約に加盟していません。私たちは両政府に、人類への破滅的被害を回避することを目的とした、この条約への参加を強く求めます。

そして、もう一つの人類に破滅的被害をもたらす存在、地球温暖化による気候変動に対しても、私たちは全力を挙げて引き続き行動していくとともに、自然エネルギー推進、平和、気候変動対策を含む国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」達成に向けて包括的かつ創造的に取り組んでいきます。

最後に、私たちは、来年の平昌オリンピック、そして2020年の東京オリンピックが真の平和の祭典として、環境を最大限考慮した持続可能なオリンピックとなるよう「PEACE&GREEN BOAT」の活動を通じて協力し合い、その過程が来たる「東アジア平和環境共同体」建設への礎となるよう努力することをここに表明します。

麗水 Yeosu

水先案内人 李泳采さんと行く麗水歴史散歩

このコースでは、水先案内人の李泳采（イ・ヨンチェ）さんの案内とともに、日本ではあまり知られてこなかった麗水（ヨス）の歴史を学びました。

今回訪問した麗水市は、韓国南部に位置する人口約30万人の都市です。ここは豊臣秀吉による朝鮮出兵を撃退した韓国の英雄李舜臣（イ・スンシン）将軍が活躍した場所です。また、1948年に朝鮮半島の統一、独立を巡る論争が起こるなか、軍の一部が政府の方針に逆らい、麗水事件という反乱を起こした地域でもあります。

まず、李舜臣将軍が戦死した後に部下たちが建てた墮涙碑（だるいひ）を訪れました。1592年の壬辰倭乱（文禄の役）において、李舜臣将軍は全羅（チョルラ）佐水使として秀吉の軍を撃退するという大きな戦果を上げましたが、その後、朝鮮王朝の皇帝の命に逆らうこととなり、一兵卒に落とされま

す。そして、1597年の丁酉倭乱（慶長の役）で朝鮮水軍がほとんど壊滅する中、再び水軍を任せられ戦っている最中に戦死しました。後の国王である光海君は将軍の名誉を回復するため、1615年にこの墮涙碑の横に統制李公水軍大捷碑を建てたそうです。

次に訪問したのは、麗水・順天（スンチョン）事件についての調査・研究を行っている麗水地域社会研究所で、李英一所長に話をうかがいました。

日本の敗戦後、朝鮮半島では人々が自主独立を訴え始めました。しかし、米ソによる影響を受け、朝鮮半島を二分した形で独立するのかという激しい論争が広まります。これにより、1946年10月には「大邱（テグ）民衆抗争」、1948年には済州島で民衆蜂起が生まれます。そして、この済州島での蜂起に対して麗水の14連隊が派遣されることとなりましたが、同連隊の2/3が同じ

同胞を殺害することはできないとし、反対の意思を表明、反乱を起こします。この動きに対して、李承晩大統領は軍を派遣、鎮圧しました。このとき派遣された政府軍は日本軍として満州の三光作戦に従事していた親日派の軍人が使われていました。

そして、その後の1980年に起きた光州（クァンジュ）事件、1987年に起きた大統領の直接選挙制改憲を中心とした民主化を要求した6月民主抗争、近年の朴槿恵大統領へのキャンドルデモなど、この麗水・順天事件などは市民の反対運動の始まりでもあったと語りました。それとともに、市民を守るための政府が、市民を虐殺したことから、どの国でも民度が低くなると国家は暴力で支配し、市民を虐殺するようになる」と指摘しました。



墮涙碑にて



麗水地域社会研究所にて



鎮南館壬亂遺物展示館にて



姑蘇洞の壁画村にて



海の方角を見つめると李舜臣将軍と亀甲船のモニュメント



カニの醤油漬（カンジャンケジャン）やタチウオの煮物が出てきました

ウラジオストック Vladivostok

ウラジオストックの若者との交流

今回寄港したウラジオストックは、ソ連が崩壊する1991年までごく一部を除いてソ連国民である市外居住者や外国人の立ち入りが禁止された閉鎖都市でしたが、その後解放されるようになり、多くの人々が訪れるようになりました。

このツアーでは、船舶の勉強をしているロシア国立海洋大学の学生と交流を行いました。この大学は2隻の船を持ち、北極の探査に必要な技術の研究や民間企業との技術開発などを行っており、2014年に行った洋上訓練では福島近海まで行き調査の手伝いを行ったというです。

まず、最初にロシア、韓国、日本からそれぞれの国の文化紹介などが行われました。韓国の参加者からは、済州島にあるゴッチャワリ学校から16歳の

学生が韓国の社会や文化などについて紹介しました。この中では宮廷料理、ピビンバやキムチ、スープにご飯を入れて食べるという食文化や扇踊り、伽耶琴、K-POPsなどの音楽が紹介されました。また、社会に参加する動きとして10代、20代はセウォル号、「慰安婦」問題などに関心を持っており、キャンドルデモなどを行っているということが紹介されました。そして日本からは、浴衣や和服などの衣服、祭りや寿司、天ぷらなどの和食文化、日本家屋や東京タワーなどが紹介されました。

ロシアからは、日本とは300年前から交流してきており、ロシア人の画家で日本の絵画を集めているコレクターもおり、1920年代には日本の歌舞伎などに関心が集まったということが紹介されま

した。また、ロシアと韓国間では海洋水族館や学術交流が行われており、今後ロシアと韓国間の定期フェリーも増便することも話し合われているそうです。

ゴッチャワリ学校の学生によるオカリナの演奏や折り鶴、日本の着物を着る体験、あるいはロシア側の学生がギターを演奏するなど、活発に交流が行われました。特に、ロシアの学生は日本の着物を着て、満面の笑みが広がっていました。

この交流会の後、小グループに分かれ、町を散策しました。グループによっては、小さなお店でロシアといえば有名なアイスクリームを買い、学生たちとウラジオストックの夏を満喫していました。また、学生たちをピースボート船内に案内し、参加者による船内の案内が行われました。ロシア人学生の一人は、以前研修で大型のコンテナ船に乗船したことがあるが、やはりこのような多くの人々を乗せた客船で仕事をしたいと、将来の夢を語ってくれました。



ロシア国立海洋大学の学生と大交流

函館 Hakodate



中華會館にて



遠くに青森県の大間町も見えます



和洋折衷の建物



カトリック元町教会



ブルーベリー摘み

境港 Sakaiminato



古代出雲歴史博物館にて



出雲大社にて

釜山 Busan

「民族と女性歴史館」を訪れて

水先案内人の鎌田慧さんとともに、釜山にある「民族と女性歴史館」を訪問しました。この歴史館は旅行会社を経営されていた金文淑さんが私財を投じて2004年に設立したもので、「慰安婦」問題に関する資料が展示されています。金館長から、館内の資料について話を聞きました。

歴史館に入るとすぐ左側に数名の女性の顔写真が飾られています。金学順（キム・ハクスン）さんを始め「慰安婦」被害者として名乗り出た女性たちです。

日本軍の兵士の体験談や手記などから「慰安婦」の存在は見え隠れしていました。そんな中、「慰安婦」にさせられた女性がいるのではないかと考えた

市民が集まり、「慰安婦」とされた女性の名乗り出るための電話を設置しました。その後、1991年に金学順（キム・ハクスン）さんが最初に名乗り出たことにより社会的に大きな衝撃が生まれ、「慰安婦」とされていたと語る女性たちが次々と名乗り始め、北朝鮮、中国、台湾、フィリピン、オランダ、インドネシア、東ティモールなどにも広がってきました。

1992年、元「慰安婦」、元女性勤労挺身隊の10人が日本政府に対する公式謝罪と賠償を求め山口地方裁判所下関支部に提訴を行います（いわゆる関釜裁判）。1998年に同地裁は立法不作為による国家賠償責任についての原告側の訴えを一部認め、日本政府に計

90万円の支払いを命じる判決を出しました。この裁判に関連して、日本政府に謝罪と賠償を求めるデモの写真も飾られています。

いくつもの写真について説明してください。金館長は、近年では朴槿恵大統領が国定歴史教科書を使用するよう通達を出していたことを紹介するとともに、今の若い人は日本の植民地政策を知らずに育ってきていると話しました（文在寅政権発足後、国定教科書は廃止されることになりました）。

今回の訪問では、このような慰安婦とされた女性たちが闘ってきた歴史を改めて見つめ、今後の日韓関係においても日本がきちんとした責任を認めていく必要性があることを実感しました。



日本大使館前に設置された少女像



民族と女性歴史館にて



船内企画紹介

ピース&グリーンボートでは、日韓からの多数のゲストをお招きし数多くの企画を行いました。その一部を紹介します。

Peace & Green Boat 第10回記念合同企画 ～初航海から第10回、そして未来へ～

チェ・ヨル、吉岡達也、ジョン・テヨン、田村美和子、鎌田慧、チョウ・ミス

今回で第10回目の日韓クルーズを迎え、初航海からの歩みを多彩なゲストとともに振り返りました。まず、チェ・ヨルさんは、これまで福島原発事故やセウォル号沈没事故などが起こったけれど、政府間の関係がよくないときでも市民同士仲良くなることができたと語りました。吉岡達也さんは「パワフルなチェ・ヨルさんとの出会いにより、我々の夢への扉は開かれました。今ではピースボートに乗るアジアからの参加者が増えています」と語りました。

ジョン・テヨンさんは、スタッフ同士、

言葉が通じなくても見て理解し、感じ、実行できるとことをみな学ぶことができた」と語りました。また田村美和子さんは、一緒に生活していると自分が何人だというアイデンティティもなくなりP&G (Peace & Green Boat) 人なんだと思うようになってきたと語りました。

鎌田慧さんは、ピースボートがアジアに向ける視線を確立し、日本、韓国、朝鮮民主主義人民共和国を船がちょうどバスストップみたいに乗り降りたりできることが将来の姿だと語りました。またチョウ・ミスさんは、「在日コ

リアンの乗船者が、日韓で分けられると我々はどちらにいけばいいんだとかつて憤慨されていた。私の目標は、このクルーズで日韓と言わない新しい東アジアの人々を作り出したいと思っていた。そして、私とあなたが出会える空間がこの船の魅力だと思います」と語りました。



ヘイトスピーチ「愛国者」たちの憎悪と暴力

安田浩一、金朋央

安田浩一さんは、ヘイトスピーチは一部の新聞などのいう憎悪表現、単なる下劣な言葉や罵倒などではなく、どんなに努力をしても乗り越えることができない属性を攻撃し、差別を扇動し、人間の尊厳を奪う暴力であると語りました。またそれと同時に、それらを行っている人は世間で思われているような一部の人、何か特別な背景を持った人たちではなく、むしろ私たちの身近にいる

ような人たちであり、誰にでもその落とし穴は用意されていると、その危険性を指摘しました。そして、その危険性について金朋央さんは「ヘイトスピーチは風邪と同じだ。自分は風邪をひきたくないけれど、ひいてしまう。それなので普段からの予防が必要であり、もしひいてしまったら治療する必要がある」と語りました。

最後に、安田さんは「沈黙を強いら

れ、表現の自由を奪われているのがマイノリティ。マジョリティの側にいる人間がまず表現の自由を守るために差別の自由を許さない社会を作るため声をあげましょう」と呼びかけました。



ポルノ被害は自己責任?～社会の偏見と守られない被害者～

宮本節子

これまでほとんど表に出てこなかったポルノ被害の背景について、宮本節子さんから話をうかがいました。

これまで宮本節子さんなどのソーシャルワーカーは、アダルトビデオに出演し、身体と精神がボロボロになり施設に入った女性たちの存在を知っていました。宮本さんは関係者とともに「ポルノ被害と性暴力を考える会」を立ち上げ、被害者の相談を受け始めました。そして、被害者自身が被害者だと思っていないこと

に気づくとともに、この性暴力被害を表す概念や言葉がないことを知ります。

ある19歳の女性は、最初タレントにならないかと声をかけられ、20歳まで数か月間ジムやレッスンに通わされました。そして、民法で契約できる20歳となり、ビデオ撮影を行うというときにアダルトビデオだとどどと気づき、相談に来ました。また、ある女性は撮影をやめると言った途端に、プロダクションから損害賠償を支払うよう迫られていました。賠償金額

分、無理やり出演させられていた女性もいたそうです。

最後に宮本さんは、被害者が訴えられなかったのは社会の偏見に沈黙させられているからであり、それは「慰安婦」問題と真摯に向き合えない社会の体質と通底していると問題の背景を説明しました。



絶滅危惧の教師たち～日韓の「環境」「平和」教育事情

シン・キョンジュン、李泳采

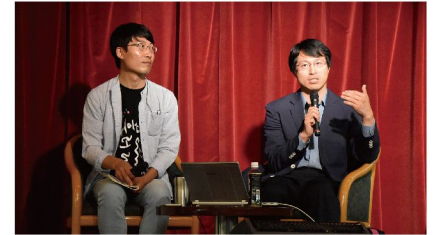
韓国では環境が教育課程の科目から外され、日本では平和教育の機会の減少が指摘されています。この問題についてそれぞれの教師が意見を交わしました。

まず、ソウルの中学校で環境教師をしているシン・キョンジュンさんから、韓国の状況が紹介されました。2000年から環境問題を専門的に教える環境教師が生まれましたが、2009年から科目の名前が変わり、全国で環境教師は採用され

なくなりました。川が埋め立てられ、食卓の食べ物は遺伝子組み換え食品が増えてきている今、きちんと環境教育を学校で行う必要があると語りました。

次に李泳采(イ・ヨンチェ)さんから恵泉女学園大学で行っている平和教育が紹介されました。同大学では生活園芸を行っており、その中で食糧問題と戦争の関係や生命に対する気づきが生まれてくると話されました。そして、学生はアジア太平洋戦争について年配者にインタビュー

ーを行ったり、沖縄、濟州島、台湾などへスタディツアーに行き、東アジアの歴史を再発見していくような、新しく平和を考える学習も行っているという報告が行われました。



挑戦人～私がパフォーマーになったわけ～

ちゃんへん.

在日コリアンとして生まれ、そのルーツに対する偏見や困難に遭う中、どのように生きてきたのかちゃんへん.さんが語りました。

日本による植民地支配の下、多くの人が朝鮮半島から日本に渡りました。そして、日本の敗戦後に起きた朝鮮戦争により、多くの方は母国に帰れなくなりました。ちゃんへん.さんは京都生まれの在日3世で、両親は朝鮮学校出身だったのですが普通の日本の学校に通

うこととなります。しかし、そこで壮絶ないじめを受けます。そのような中、中学生の時にジャグリングショップに出会い、米国に行き、実力を試したいと思うようになり、家族に相談します。親族は南北バラバラに住んでいます。米国に渡るのならば韓国籍をとという話になった時に、祖母は「南北分断、民族分断、朝鮮戦争を認めるのか!」とちゃんへん.さんに強く問いかけました。

今、すでにちゃんへん.さんの友人に

在日6世が生まれたということです。ちゃんへん.さんは、祖国が分断され、日本で生きる中、夢を持ってその険しい道を歩み続ける、その姿勢を自作のラップ「根無し草」で訴えました。



この船に集まった人々～私のルーツ～

金朋央、李正久、イ・ヨンホ、岡田暁子、櫻木典子

この船には多様なルーツを持つ方々が乗船しています。今回、金朋央さんが参加者の方のルーツとその生きてきた道のりを聞きました。

在日朝鮮人2世の李正久さんは、日本から米国に行く際、日本政府が発行した渡航証明書を持っていたのですが、米国の入国管理局で「このパスポートは何だ、難民か」といわれ、足止め食らったときのことを語りました。また、ソウル生まれのイ・ヨンホさんは、高校の時に来日し、その後韓国の大学へ進学し、再び日本に戻りました。日本に帰ってきてからアルバイトをしてい

た同僚の人たちがとても温かい人たちであったと話しました。

櫻木典子さんはソウルで生まれ、祖父の時代に満州に渡り、日本の敗戦時には中国の丹東にいました。そして、ソ連軍が丹東へ入ってきてた後、中国共産党軍が来て1年足止めを受けた後、米軍支配下の仁川へ行き、貨車で釜山まで横断、正規の引き上げ船で博多へ行き、国鉄で名古屋にたどり着いたと、その困難な帰国の道のりを語りました。また岡田さんは、父親は台湾人で母親は日本人で、アイデンティティに関して精神的に浮遊感があつたと語り、

思春期の揺れ動きはこの船の揺れがぴったりだったと、その複雑なルーツを背負う人生について語りました。



韓国の民主化は日本に何を突きつけているのか

野平晋作

韓国では100万人を超えるデモが連日行われ、文在寅政権が誕生しました。しかし、支持率が8割を超えている文在寅政権のことを日本では反日、親北の困った政権だと報道しています。



この日韓の認識のギャップには歴史認識の違いがあると野平さんは語りました。韓国では、日本による植民地支配から解放された後も、「親日派」と呼ばれるかつて日本による統治に協力した人々が権力を握りました。韓国の民主化は「親日派」の政権を打倒すること、日本による植民地支配の負の遺産を清算することであったとも言えます。したがって、韓国の民主化は「反日」政権の誕生となります。しかし、「反日」とは「反日本帝国主義」のことで、日本が嫌いということではありません。

せん。ドイツの反ナチスに近い概念です。日本はドイツと違って過去を清算できていないため、日本が過去に行った植民地支配や侵略戦争を批判されると、それを現在の日本を批判するものとして受け止めます。変わるべきは、「反日」の韓国ではなく、過去を清算できない日本の方ではないでしょうか。韓国で、解放後に自国の政権が行った人権弾圧の真相究明が行われていることにもっと注目すべきです。韓国の民主化は日本にだけでなく、自国の過去清算を求めていると訴えました。

日韓合同企画トークセッション「共存」

キム・ヨンシン、ソ・チョンソク、キム・ウンギョン、安富歩、林篤志

宗教、人種、性、環境などの違いがある中、私たちが共存するために必要なことを多様なゲストを迎え、意見を交わしました。

まずソ・チョンソクさんは、韓国では子育ての環境が変化したため、子育てをすることが幸せというよりも負担に感じる人が多くなっていると話します。その理由として、昔は子どもが外に遊びに行くと、村のおじさんやお兄さん、お姉さんが相手をしてくれたが、今5～6歳の子どもが外に一人でいると親の虐

待として訴えられるようになる可能性がある」と指摘しました。林篤志さんは、人口の減少や子どもの貧困、あるいは地方の衰退などの問題が生まれる中、新しい共同体を作ることに挑戦していると語ります。それは、一つの地域に永住するという形ではなく、廃校なども再利用し、居住地をどんどん変えていけるような流動的な社会であると語りました。

次にキム・ウンギョンさんは、環境を保護しなければというときに自分と関係

ないと思う人が多いので、視覚的に問題が見えるよう、捨てられた針金を使い花や鳥を作り、環境運動を芸術として利用していると語りました。また安富歩さんは、これまでの資本主義経済のルールが崩れてきており、これからは個性を持った人たちが共生する社会を作るべきだと訴えました。



不確実性時代の日韓若者の失望と夢

カン・ミョング、今井紀明、宮本節子、キム・ヨンギユ、田中希望

日韓ともに不景気になり、将来を見通せず、生き辛さを抱える若者が増えてきました。今回その背景にある社会の問題を探りました。

日韓及び欧米の若者の結婚観について研究をしているカン・ミョングさんは、日本ではお金もあり能力もあるが男女が女性には興味がないという「草食男子」が生まれ、韓国では貧困のため恋愛、結婚、出産を放棄した「3放世代」が現れていると、両国の若者の現状を紹介しました。また宮本節子さん

は、1970年代から貧困の再生産が見えてきたと話し、日本は現在貧困連鎖の3代目であり、経済的な貧困をベースにして労働関係の排除、教育の排除、社会関係の排除などが現状を作っていると指摘しました。今井紀明さんは、若者の結婚について、経済的に厳しいということもあると思うが、コミュニティに所属していないことにより人間関係が薄いこともあるのではないかと疑問を呈しました。また、韓国の女子学校で教えている参加者からは、女子学生はお母

さんや周りのおばさんを見ており、結婚したいと思わないようになっており、韓国社会では結婚のメリットがなくなってきたのではないかという意見が出されました。



写真で綴る
日韓クルーズ
Photo



瀬戸大橋通過中



洋上夏祭りでのファッションショー



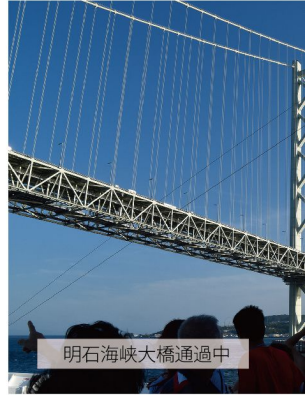
墨流し体験中



イ・ハン Chol さんのコンサート



GETによる英会話教室



明石海峡大橋通過中



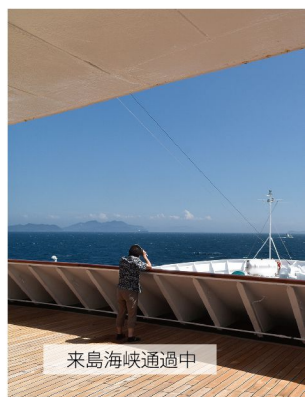
環境問題を考えるワークショップ



関門海峡通過中



フリーハグしませんか?



来島海峡通過中



卓球大会



専属バンドによる生演奏



バブル&マジックショー



社交ダンス教室



船上バーベキュー





今回のクルーズにはプロジェクトを通して、福島や韓国、ブラジルなど多くの子どもたちが乗船し、大交流が行われました。

今も原発災害の影響によりさまざまな困難を強いられている福島から、NPO「南相馬こどものつばさ」を通じて南相馬市の中高生11名が乗船しました。また、ブラジル領事館との共同プロジェクトで日本に住む日系ブラジル人の2名の子どもたち、副領事を含め6名が乗船しました。その他、一般の参加者として日韓から多くの中学生以

下の子どもたちが乗船しました。

船内では、韓国の子どもたちと環境問題について一緒に考えたり、お互いの言語を学んだりしました。そして、訪れた寄港地でも、文化、食事、歴史、環境、戦争など様々なテーマについて学ぶ旅となりました。

福島子どもプロジェクト

ピースボートでは、保養と国際交流の体験を通して、子どもたちに健康と夢を届けたいとの思いから、2011年の震災直後に「福島子どもプロジェクト」を立ち上げ、一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンターとともに実施しています。



在日ブラジルユースプロジェクト

このプロジェクトは、2014年からピースボートと在日ブラジル総領事館が協力して行っているもので、日本に住む日系ブラジル人の高校生を対象にエッセイコンテストを実施し、その優秀者を船旅に招待するという取り組みです。





GF子ども 洋上学校

これからの未来を担う子どもたちが「一つの船」に乗り、東北アジアの環境、歴史、文化に触れあい、船内でも様々な分野の専門家からお話を聞きながら、将来の夢膨らむ船旅を毎年行っています。



PB子ども アクティビティ

未就学児、小学生の参加者も洋上生活を楽しめるよう企画したのが「子どもアクティビティ」です。このアクティビティは子どもの好奇心、学ぶ力と表現力を育む多彩な船内プログラムです。



参加者の声



キム・ヨンギユさん 20代

今回、私の通っている大学が主催するプログラムで乗船しました。このクルーズでは、講演者との質疑応答の後も船内でコミュニケーションできるのが魅力的だと思いました。船内では、脳科学者の話やビックデータの話、コンヒギョンさんの話などを聞きました。特に、コンヒギョンさんが話されていた「他人を通して自分を知る」というフレーズが頭に残りました。寄港地では、函館に多様な宗教の建物が同じ地域に集まっていたのは意外で、日本は宗教が多く、神様が多いと感じました。また、よく海外旅行に行くと視野が広がると言いますが、今回の船旅を通して、その視野を広げるというのは自分を広げることだと思うようになりました。

2006年にPeace&Green Boatにコミュニケーションコーディネーター（CC）として乗船しました。その時は独身だったのですが、家族ができれば一緒にまた乗りたいと思っています、今回11年ぶりに妻と子どもとともに乗船しました。子連れだったので、お年寄りがよく声をかけてくれ、赤ちゃんのおかげだと思いました。

また、寄港したロシアのウラジオストックのツアーでは、海洋大学の学生たちと交流することができました。現地の人たちと交流することは普通の旅行ではできないですし、私自身海洋関係の仕事をしているのでとてもよかったです。

Peace&Green Boatは今では日韓からの参加者が多いですが、これからは中国からの参加者も集めて、アジアのPeace&Green Boatになるともっとよいと思います。そして、その時にはまた乗ってみたいと思っています。



シム・ヨングさん 40代
ユン・ヘジさん 40代 シムジクくん 20か月

2012年に脱原発クルーズを謳ったPeace&Green Boatに乗船して以来、毎回Peace&Green Boatに乗っています。これまでこのクルーズでは、日韓の参加者とイムジン河や朝露などを歌ってきました。今の日本では労働歌はほとんど歌われていませんが、以前韓国から招いた労働者の方が民主歌謡を歌っていたのにカルチャーショックを受けました。それから韓国のCDを買って丸暗記し、民主歌謡を歌うようになったのが始まりです。このクルーズで知り合った韓国の方とは、国を越え、互いの家へ泊りに行く関係に発展しています。

かんちゃん&Leeバンド

2005年のPeace&Green Boatから、このクルーズにこれまで乗り続けています。今このクルーズでバンドを一緒にやっている菅野さんとは2013年に会いました。クルーズで行っている企画では、韓国の人に日本の童謡を覚えてほしい、日本人には韓国の童謡を覚えてほしい、韓国の民主化の労働歌を知ってほしいということで、参加者と童謡や労働歌と一緒に歌う自主企画を行っています。それを通して、日本人が韓国のことを知る入口になり、船を下りた後に交流が継続して民間交流が生まれていくことにより、いい関係作りを続けていければと思っています。



李正久さん 50代

今回ピースボートには初めて乗船しました。東京の荒川区には済州島から来た方が多く住んでいて、その関係で友好都市関係を結んでいます。その関係もあり、毎年荒川区では済州4・3事件の追悼集会を行っており、これまで毎年参加してきていました。そしてこのような機会に、4・3事件に関連して政府からの出動命令を拒否した軍隊が麗水にいたということを知ることがありました。今回、その麗水で麗水地域社会研究所の館長からこの事件について話を聞き、当時の写真を見せてもらい、衝撃を受けました。

また船内企画の中では、歴史などには興味がなかった大学生が李泳采先生と出会い、現場に行き、心に響いたことを吸収して大学院に進み、研究を深めようとしている姿勢に感動しました。



本嶋 松人さん 80代



森本 孝子さん 70代

このクルーズは小さい頃の夢の第一歩でした。高校生のときに熊本の天草に住んでいたのですが、どこに行くにしても船でした。そして、その船を見ている中で、いつか日本を出たいと思っていました。今回の乗船は、昨年亡くなった家内が、私が入社が好んで、英語や中国語、スペイン語を勉強をしていたのをみて勧められていたのがきっかけでした。船内では、韓国の方と英語で韓国の文化などの話をしました。

ロシアのウラジオストックでは、シベリアに抑留されていた叔父と叔母の辛い経験を思い出しました。当時その経験から立ち直るのに7年から10年かかっており、2人の「個人は信用できるけれど、国家は信用できない」という言葉を今でも強く覚えています。



ジョ・ミンヨンさん 10代

韓国の済州島にあるゴッチャワリ学校に通っているのですが、このクルーズに以前参加したことのある学校の先輩から話を聞き、乗船しました。学校では勉強よりも遊びを大切にしています。例えば、学校の中でじっとしているのではなく、ベトナムへ行き、生活が苦しい人に会い、

環境について考えたりしました。また、ネパールの地震の時には現地に行き、オカリナの演奏を行ったり、子どもたちや村の人たちとの交流を行いました。

今回、一番記憶に残ったのは船内での夏祭りのイベントでした。この中で、日本のソーラン節が披露され、日本の文化を近くに感じることができました。最初は体力的に少し疲れましたが、デッキに出ると海が見え、船内では素敵な人たちに恵まれたので楽しかったです。また寄港地では、普通会えない人との交流を通して自分が成長する機会となりました。

INDEX

水先案内人一覧

今井紀明／認定NPO法人D×P代表
李泳采／恵女学園大学准教授
片岡英夫／NPO法人 世界遺産アカデミー認定講師
鎌田慧／ルポライター
金朋央／コリアNGOセンター東京事務局長
ちゃんへん。／世界的パフォーマー
林篤志／Next Commons Lab代表
宮本節子／フリーソーシャルワーカー
安田浩一／ジャーナリスト
安富歩／東京大学東洋文化研究所教授

環境財団ゲスト一覧

イ・ハンチョル／歌手
イ・ヒョジュ／(株)ヒョジュ代表、韓服デザイナー
ウン・ヒギョン／作家
キム・ウンギョン／ワイヤーアーティスト
キム・ハンジョン／共に民主党・国会議員
キム・ヒョンジョン／CBSプロデューサー
キム・ブギョン／ブズ代表
キム・ヨニ／大邱大学校社会福祉学科教授
キム・ヨンシン／CBSアナウンサー
グァク・ドンホ／マジシャン
コ・ヨンハ／韓国エンジェル投資協会会長
シン・キョンジュン／韓国環境教師会スポークスマン
ソ・チョンソク／幸せな子研究所所長
ソン・キリョン／(株)DAUM SOFT副社長
チェ・ガンウク／法務法人チョンメク弁護士
チェ・ヨル／環境財団代表
チョ・ジンマン／チョ・ジンマンアーキテクト代表
チョ・セヨン／フォトグラファー
チョ・ユミ／パブリシスワンコリア (Publicis One Korea) 代表
チョン・ジェスン／韓国科学技術院(KAIST)バイオ・脳工学科教授
バブルドラゴン／バブルアーティスト
ハン・ピア／世界市民学校校長
ノ・ソヨン／アートセンター・ナビ館長
ノ・ドンヨン／ソウル大学病院ヘルスケアシステム・カンナムセンター院長



**PEACE
BOAT**

第10回 ピースボート日韓クルーズ 報告書
発行:国際NGOピースボート
発行日:2017年12月
編集:野平晋作、許美善
執筆:越智信一朗
写真:Peace Boat

この刊行物に関するお問い合わせは下記までお願いします。
〒169-0075
東京都新宿区高田馬場3-13-1-B1
TEL:03-3363-7561
FAX:03-3363-7562
E-MAIL: info@peaceboat.gr.jp